

教育研究業績書

2022年11月07日

所属：食物栄養学科

資格：講師

氏名：小林 知未

研究分野	研究内容のキーワード	
栄養教育論、栄養疫学、公衆栄養	食事調査、栄養教育、食育、地域活動	
学位	最終学歴	
博士（学術）、修士（生活環境学）、学士（食物栄養学）	奈良女子大学大学院 人間文化研究科 共生自然科学専攻 博士課程	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 管理栄養士国家試験受験対策	2014年4月～現在	管理栄養士国家試験の過去問・結果や模試問題・結果を分析し、学生がつまづきやすい問題の検討を行っている。まや。その検討結果を活用した管理栄養士国家試験受験対策を行っている。
2. 教育内容の理解度の確認	2014年4月～現在	講義や実習中で、受講生を数名選び、質問を与える、もしくは全員に挙手をしてもらう等、個々の理解の確認を行っている。
3. オフィスアワーの活用による教育効果の向上	2014年4月～現在	教育支援を行うために、オフィスアワーを周知し、授業の質問や学生生活の心配事等を聞き取る機会を増やした。
4. 視聴覚教材を用いた教育の実施	2014年4月～現在	授業で用いる教科書の他に、視覚的な教材（パワーポイントや動画、写真等）を用いて、学生の理解度向上を行っている。
5. インターネット活用による授業サポート	2014年4月～2020年3月	「公衆栄養Ⅰ・Ⅱ」「公衆栄養学実習」「公衆栄養学臨地実習」「栄養教育論Ⅰ」「栄養教育論実習」「卒業研究」において実践した。 C-learningを用い、教員と学生がメールや掲示板を用いて、情報提供、質問、回答や指導を行った。これにより、学生とのコミュニケーションを取り、学生の学習に関する悩みや心配事、学習の進捗状況を把握でき、問題が起こった場合に素早く対処することが可能であった。
6. ClassRoom活用による授業サポート	2020年4月～現在	各講義及び実習、クラスでClassRoomを立ち上げ、学生が質問を行いやすい環境を整え、質問、回答や指導を行った。また、授業や実習、大学生活で活用できる情報提供し、学生とのコミュニケーションを取り、学生の学習に関する悩みや心配事、学習の進捗状況を把握でき、問題が起こった場合に素早く対処している。
2 作成した教科書、教材		
1. 小児用食物摂取頻度調査 食品モデル写真集	2008年3月	伊達ちぐさ、福井充共著 奈良女子大学生生活環境学部食物栄養学科公衆栄養学研究室発行 小児用食物摂取頻度調査を行う際に、対象者が食物の「量」と「頻度」を思い出す際に使用する写真集である。
2. 貧血対策食育用冊子	2018年6月	堺フェニックスライオンズクラブと日本赤十字社 大阪府赤十字血液センターと食物栄養学科が連携して貧血対策食育用冊子「テツ子のでつこ講座」を作成した。
3. 健康カレンダー	2021年12月	堺市中区八田荘団地自治会から依頼され、地域住民の健康へ寄与するための情報（食事バランスチェック、バランスの良い食事の整え方、骨粗しょう症予防、脱水予防、夏バテ予防、減塩方法、生活リズムの整え方、等）を盛り込んだ「健康カレンダー」を作成し、八田荘団地自治会に所属する全戸に配付してもらった。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. キャンパスガイド編集委員	2020年9月1日～2021年3月31日	キャンパスガイド編集委員として、キャンパスガイド作成に従事した。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
2. 学友会活動等での学生支援	2021年4月～現在	2021年度から学生委員として、学友会活動等での学生支援を行っている。
3. 担任業務	2021年4月～現在	2021年度入学生の担任を行っている。
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 栄養士	2004年3月23日	栄養士名簿登録番号 兵庫県 第四四一四号
2. 管理栄養士	2004年6月30日	管理栄養士名簿登録番号 第一一四一五号
3. 修士(生活環境学)	2006年3月19日	論文題目名：リハビリにおける機能回復と栄養状態について
4. 博士(学術)	2010年9月30日	論文題目名：Dietary methodological study: development of a food frequency questionnaire for Japanese children
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 【報告書】平成22年度泉南市健康教育普及推進事業「ウォーキングの輪を広めよう、生涯元気!講座」報告書	2010年3月	(発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：P31-33) 講座前後における身体組成及び身体活動量、歩数、食事摂取量、生きがいスケール等の変化に関して報告書をまとめた。この講座に参加することにより、人に認められ、さらに人に必要とされたことが生きがい感に寄与していると考えられた。
2. 【報告書】平成24年度高槻市健康づくり・地域ネットワーク推進事業「リーダーカアップウォーキング教室」報告書	2012年3月	(発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：P20-43) 講座前後における身体組成及び身体活動量、歩数、食事摂取量の変化に関して報告書をまとめた。今回の講座では、健康ウォーキングマップを作成することが重点的に展開されていたため、今後、健康づくりのために、運動だけでなく、食事改善方法に関する情報を定期的に対象者に提供していく必要があると考えられた。
3. 【報告書】平成25年度富田林市健康づくり・地域ネットワーク推進事業「富田林ウォーキングサポーター養成講座」報告書	2013年3月	(発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：P12-36) 講座前後における身体組成及び身体活動量、歩数、食事摂取量の変化に関して報告書をまとめた。男性では、歩数に大きな変化が見られなかったが、中等度以上の身体活動時間が増加傾向にあった。また食事ではPFC比率が改善していた。女性では低強度の身体活動時間が減少し、脂質エネルギー比率に改善がみられた。
4. 【報告書】平成26年度交野市健康づくり・地域ネットワーク推進事業「健康もりもり隊養成講座」～市民に健康を啓発するリーダーの養成～報告書	2014年3月	(発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：P13-28) 講座前後における身体組成及び身体活動量、歩数、食事摂取量の変化に関して報告書をまとめた。この講座を開催することで、対象者の健康づくりへの意識向上に寄与できた可能性が示唆された。
5. 富田林保健所事業 NoベジNoライフ!セミナー 講師	2014年9月10日、2014年12月23日	大阪府富田林保健所の事業である高校生の生活習慣及び朝食改善、野菜摂取量増加を図ることを目的とした「NoベジNoライフ!セミナー」の講師として、大阪府立金剛高校の高校生に対して食教育を行った。また、食教育の効果を評価するために、朝食食事調査、アンケート調査、身体計測を実施した。結果は高校生に報告し、食習慣改善のための資料として還元した。
6. 富田林保健所事業 NoベジNoライフ!セミナー 講師	2015年7月16日、2015年9月18日	大阪府富田林保健所の事業である高校生の生活習慣及び朝食改善、野菜摂取量増加を図ることを目的とした「NoベジNoライフ!セミナー」の講師として大阪府立富田林高校の高校生に対して食教育を行った。また、

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
4 その他		
7.【報告書】平成28年度熊取町ヘルスアップ推進員養成事業「ココカラびんびん!元気リーダー養成講座」報告書	2016年3月	食教育の効果を評価するために、朝食食事調査、アンケート調査、身体計測を実施した。結果は高校生に報告し、食習慣改善のための資料として還元した。 (発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：P9-30)
8.夢ナビライブ 講師	2016年6月18日	講座前後における身体組成及び身体活動量、歩数、食事摂取量の変化に関して報告書をまとめた。取り組みを続けることにより、継続した健康維持、そして健康増進に繋がる可能性があると考えられた。
9.富田林保健所事業 NoベジNoライフ!セミナー 講師	2016年6月23日、2016年9月16日	FROMPAGEが主催する夢ナビライブにて、高校生約200名を対象に、これまで高校生を対象に行ってきた朝食の食事バランスや生活習慣、不定愁訴調査結果や身体計測値を用いて、データに基づいた「朝食摂取の重要性」「朝食の料理バランスの重要性」の説明を行った。講義参加者からのアンケート結果より、朝食内容についての関心が高まり、自分自身の朝食を見直したいとの声が多く聞かれた。
10.大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座) 講師	2016年7月28日	大阪府富田林保健所の事業である高校生の生活習慣及び朝食改善、野菜摂取量増加を図ることを目的とした「NoベジNoライフ!セミナー」の講師として、大阪府立長野高校の高校生に対して食教育を行った。また、食教育の効果を評価するために、朝食食事調査、アンケート調査、身体計測を実施した。結果は高校生に報告し、食習慣改善のための資料として還元した。
11.大阪府立貝塚高等学校 体験学習講座 講師	2017年1月12日	大阪府大東市が開催している、大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座)の講師として、大東市民を対象に減塩についての講義・実習を行った。
12.堺市中区子どもの生活習慣応援事業への参画	2017年4月～現在	大阪府立貝塚高等学校にて、高校生を対象に食物栄養学科で学ぶ科目についての説明を行った。また、公衆栄養学・栄養教育分野内容を中心に授業を行った。この授業を通して、高校生が自分自身の食生活への興味関心意欲を高められる内容とした。
13.近畿大学泉州高等学校 保護者会 講師	2017年6月4日	堺市宮園校区の地区組織が主体となり毎月1回行っている「はやおきして朝ごはんを食べよう」事業に参画し、ボランティア学生への指導を行っている。また、この活動について毎年活動報告書をまとめ、小学校、区役所、町づくり協議会に取組み報告を行っている。
14.夢ナビライブ 講師	2017年6月17日	近畿大学泉州高等学校の保護者会にて、高校生の保護者及び教職員向けに思春期の子どもの食事に関する講義を行った。
15.大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座) 講師	2017年6月17日	FROMPAGEが主催する夢ナビライブにて、高校生約200名を対象にこれまで高校生を対象に行ってきた朝食の食事バランスや生活習慣、不定愁訴調査結果や身体計測値を用いて、データに基づいた朝食の役割について講義を行った。
16.大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座) 講師	2017年7月20日	大阪府大東市が開催している、大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座)の講師として、大東市民を対象に減塩についての講義・実習を行った。
17.大阪府立農芸高等学校 体験学習講座 講師	2018年1月14日	大阪府立農芸高等学校にて、高校生を対象に食物栄養学科で学ぶ科目についての説明を行った。また、公衆栄養学・栄養教育分野内容を中心に授業を行った。
18.富田林保健所事業 NoベジNoライフ!セミナー 講師	2018年6月16日、2018年9月22日	大阪府富田林保健所の事業である高校生の生活習慣及び朝食改善、野菜摂取量増加を図ることを目的とした「NoベジNoライフ!セミナー」の講師として、大阪府立金剛高校の高校生に対して食教育を行った。また、食教育の効果を評価するために、朝食食事調査、アンケート調査、身体計測を実施した。結果は高校生に報告し、食習慣改善のための資料として還元した。
18.大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座) 講師	2018年7月26日	大阪府大東市が開催している、大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座)の講師として、大東市民を対象

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
19. 「こども霞が関見学デー」(厚生労働省) 講師	2018年8月1日	に減塩についての講義・実習を行った。
20. まちかど保健室 講師	2019年3月9日	「こども霞が関見学デー」(厚生労働省)において、子どもとその保護者を対象に、「野菜をおいしく食べて元気になろう」をテーマに講義を実施した。
21. 【報告書】2018年度 堺市宮園校区早起きをして朝ごはんを食べよう会ボランティア活動報告書	2019年3月31日	堺市南区で開催されている「まちかど保健室」において、312弁当箱法を用いた食事バランス改善弁当について講義を行った。
22. 大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座) 講師	2019年7月30日	宮園校区地域まちづくり協議会主催のもと、毎月1回開催されている「子どもの生活習慣応援事業」について、2018年度に実施したボランティア参加についてまとめ、また、朝食摂取状況に関する調査等についてもまとめた。(小林知未、金田直子、福田ひとみ)
23. 【報告書】2019年度 堺市宮園校区早起きをして朝ごはんを食べよう会ボランティア活動報告書	2020年3月31日	大阪府大東市が開催している、大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座)の講師として、大東市民を対象に減塩についての講義・実習を行った。
24. 【報告書】2020年度 堺市宮園校区早起きをして朝ごはんを食べよう会ボランティア活動報告書	2021年3月31日	宮園校区地域まちづくり協議会主催のもと、毎月1回開催されている「子どもの生活習慣応援事業」について、2019年度に実施したボランティア参加についてまとめ、また、朝食摂取状況に関する調査や学生ボランティア活動に関するアンケート調査結果、子どもたちへの食育教材検討等についてもまとめた。(小林知未、金田直子、福田ひとみ)
25. 大阪府立 花園高等学校 分野別説明会 講師	2021年9月30日	宮園校区地域まちづくり協議会主催のもと、毎月1回開催されている「子どもの生活習慣応援事業」に、武庫川女子大学食物栄養学科栄養教育論研究室(小林)は2020年度からこの取組みに参画している。2020年度に実施したボランティア参加についてまとめ、また、新型コロナウイルス感染症対策ポスターのアンケート調査結果等についてもまとめた。(小林知未、金田直子、福田ひとみ)
26. 【報告書】2021年度 堺市宮園校区における食育活動報告書	2022年3月31日	花園高等学校にて、食物栄養科学部に関する説明を行った。
27. 【報告書】2021年度 堺市宮園校区早起きをして朝ごはんを食べよう会ボランティア活動報告書	2022年3月31日	堺市立宮園小学校の掲示板上に「食育ポスター」の掲示し、食育通信「みやそのあさごはん会通信」を配付した。2022年度の堺市立宮園小学校での食育活動(食育ポスター・食育通信)活動及び、児童の生活習慣状況調査結果、給食残食分析結果をまとめた。
28. 【報告書】乳幼児の栄養状態の簡易な評価手法の開発：平成27年度乳幼児栄養調査を用いた検討	2022年7月4日	宮園校区地域まちづくり協議会主催のもと、毎月1回開催されている「子どもの生活習慣応援事業」について、2021年度に実施したボランティア参加についてまとめた。(金田直子、小林知未、久保佐智美、福田ひとみ)
		平成27年度に実施された乳幼児栄養調査のデータを解析し、乳幼児の体格と食行動・生活習慣等との関連について検討し、低体重・過体重等の栄養リスクと関連する質問項目を抽出し、乳幼児の栄養状態の簡易な評価法の質問項目案へ反映させるための基礎資料を得ることを目的とした。今後、文献や他の調査を分析し、乳幼児の栄養状態の簡易な評価法の質問項目を検討していく必要がある。(乳幼児の発育・発達、栄養状態の簡易な評価手法の検討に関する研究 報告書)

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 食物と栄養科学シリーズ 栄養教育論 第2版	共	2017年3月	朝倉書店	著者:朝倉書店 担当範囲:田中敬子、前田佳予子、小林知未(他8名) 担当範囲:3「栄養教育計画立案」、5「栄養教育における国際的動向」

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2. 公衆栄養学第5版	共	2017年3月	光生館	著者:古畑公、松村康弘、小林知未(他14名) 担当範囲:第3章「国民健康・栄養調査」、「国の健康増進基本方針と地方計画」
3. 公衆栄養学実習 改訂2版 学内編	共	2018年3月	南山堂	著者:幸林友男、上田秀樹、小林知未(他8名) 担当範囲:第4章「計画したプログラムの実施」「プログラム評価」
4. 公衆栄養学 第6版	共	2018年3月10日	光生館	著者:古畑公、松村康弘、鈴木三枝、小林知未(他17名) 担当範囲:第3章「国民健康・栄養調査」、「国の健康増進基本方針と地方計画」
5. 公衆栄養学 第7版	共	2019年3月10日	光生館	著者:古畑公、松村康弘、鈴木三枝、小林知未(他18名) 担当範囲:第3章「国民健康・栄養調査」、「国の健康増進基本方針と地方計画」
6. 公衆栄養学 第8版	共	2020年3月30日	光生館	著者:古畑公、松村康弘、鈴木三枝、小林知未(他17名) 担当範囲:第3章「国民健康・栄養調査」、「国の健康増進基本方針と地方計画」
7. 公衆栄養学 第9版	共	2021年3月10日	光生館	著者:古畑公、松村康弘、鈴木三枝、小林知未(他17名) 担当範囲:第3章「国民健康・栄養調査」、「国の健康増進基本方針と地方計画」
8. 公衆栄養学 2022年版	共	2022年3月	光生館	著者:古畑公、松村康弘、鈴木三枝、小林知未(他17名) 担当範囲:第3章「国民健康・栄養調査」、「国の健康増進基本方針と地方計画」
2 学位論文				
1. Dietary methodological study: development of a food frequency questionnaire for Japanese children	単	2010年09月		3-11歳の子どもを対象に食事調査を実施し、得られた586名の食事データから供給率法・重回帰法を行い、75項目の小児用食物摂取頻度調査法(以下、CFFQ)を開発した。また、開発したCFFQ及び成人用に開発されたAFFQを用いて、3-16歳の子ども103名を対象とし、子どもの食事調査法として、どちらの方法が有用であるか検討した。3-11歳の子どもにおいて、食事摂取量を評価するには、CFFQの方が有用であることが示唆された。(学位取得:国立大学法人 奈良女子大学)
3 学術論文				
1. 10代から始める生活習慣病対策と中学・高校・大学一貫教育システムの構築	共	2005年3月1日	生物高分子学会誌 Vol.5, No.1, Page17-18	中学・高校・大学一貫教育課程をいかして、10代からの生活習慣病への意識開拓、早期対応、バイオサイエンスや生命への理解、興味の誘発というこれからの教育システムを考えた。大学生対象の実際の調査では、肥満でなくてもやせ願望が強い傾向にあり、継続した食行動調査とそれに基づく栄養管理指導システムの構築とのリンクが必要である。(矢野めぐむ、小林知未、猪原梨沙、瀧井幸男)
2. Development of a food frequency questionnaire to estimate habitual dietary intake in Japanese children (査読付)	共	2010年4月	Nutrition Journal	小児用食物摂取頻度調査法(以下、CFFQ)を開発するために、幼稚園児・小学生を対象に1日の食事調査を実施した。この調査で得られた料理について、75個の質問項目を得た。この75項目に小学校の給食摂取状況質問票を加え、CFFQを完成させた。 (Tomomi Kobayashi, Miharuru Kamimura, Shino Imai, Chihiro Toji, Naoko Okamoto, Mitsuru Fukui and Chigusa Date)
3. Reproducibility and validity of the food frequency questionnaire for estimating habitual dietary intake in children and adolescents(査読付)	共	2011年3月	Nutrition Journal	子どもの日常的な食事摂取状況を評価するために開発したCFFQと成人用に開発された既存の食物摂取頻度調査法(AFFQ)を用いて成長期(3-16歳)の子ども89名を対象に妥当性と再現性を検討し、年少群において、CFFQの有用性が示唆された。 (Tomomi Kobayashi, Miharuru Kamimura, Shino Imai, Chihiro Toji, Naoko Okamoto, Mitsuru Fukui and Chigusa Date)
4. Effectiveness of diet versus exercise intervention on weight reduction in local Japanese residents(査読付)	共	2012年1月	Environ Health Prev Med	体重を減量するためには、食事介入と運動介入のどちらが効果的であるかを評価することを目的とした。運動のみで介入を行うよりも食事と運動を組み合わせる介入を行うことが、体重減少等に有効であることが示唆された。 (Chihiro Toji, Naoko Okamoto, Tomomi Kobayashi, Yoko Furukawa, Sanae Tanaka, Kayoko Ueji, Mitsuru Fukui and Chigusa Date)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
5. 成人における年代別・性別の共食頻度と生活習慣、社会参加および精神的健康状態との関連(査読付)	共	2015年12月	栄養学雑誌 73(6), P243-252	家族との共食頻度に影響を与える要因を明らかにするため共食頻度と生活習慣、社会参加および精神的健康状態の関連について家族と同居している成人935名を対象者に調査を行った。共食の推進には、年齢や性別の阻害要因・促進要因に配慮した施策が必要と考えられる。(赤利吉弘、小林知未、小林千鶴、植杉優一、内藤義彦)
6. 高齢者における食行動と身体状況との関連について	共	2016年12月	帝塚山学院大学人間科学部研究年報 18号P85-92	高齢者の朝食内容や身体状況について把握するために、大阪府S市近辺に在住している55名(男性9名、女性46名)の高齢者(平均年齢±標準偏差(以下同様)男性70.9±7.3、女性63.4±9.5歳)を対象とした。女性において、朝食で様々な食品を食べている者や好ましい食行動をしている者の方がBMIや体脂肪率、収縮期血圧が低かった。(小林知未、新野弘美、福田ひとみ)
7. 若年者におけるロコモティブシンドロームと食習慣や食行動、ストレス状況との関連について	共	2017年12月	帝塚山学院大学人間科学部研究年報 19号P124-133	大学生を対象としてロコモ度テストを用いて若年者におけるロコモティブシンドローム(以下、ロコモ)の実態を把握し、さらに食習慣や食行動ストレス状況等との関連要因を検討することを目的とした。今回の調査における対象者の半数近い者がロコモのリスクを有していたため、若年期からのロコモの予防対策としての食教育や運動教育の実施が急務であると考えられた。(小林知未、金田直子、新野弘美)
8. 管理栄養士・栄養士、栄養教諭を目指す学生による主体的な地域ボランティア活動の効果と今後の展望	共	2017年12月	帝塚山学院大学人間科学部研究年報 19号P115-123	管理栄養士・栄養士および栄養教諭を目指す学生の主体的な地域ボランティア参加動機、学びを把握し、今後に向けた展望を考察するために、地域ボランティア参加者を対象に、自記式質問票で調査を実施した。ボランティア参加動機では、奉仕の精神、自身を高める機会として期待があることが確認できた。また、栄養教諭免許を取得予定である学生は、ボランティアに対しての満足度が高い傾向にあった。(金田直子、小林知未、八竹美輝、福田ひとみ)
9. 高校野球選手を対象に媒体の受け入れやすさに着目した食教育の実践と評価(査読付)	共	2019年1月	日本食育学会誌 第13巻第1号P13-22	食教育を受ける機会が少ない高校野球選手19名を対象に、媒体の受けやすさに着目した食教育プログラムを実施し、このプログラムが食事に対する態度や体組成変化に有効であるか検討した。食教育を実施したことにより、食に対する態度や体組成に改善が見られたため、選手の身体づくりに望ましい影響を与えられたことが示唆された。(上田 由喜子、山本 千尋、明神 千穂、小林 知未)
10. 大学生におけるポスターを活用したポピュレーションアプローチの検討(査読付)	共	2020年7月25日	日本食育学会誌 第14巻第3号P167-175	ポスターを活用し大学生を対象とした、大学における情報へのアクセスの確立を目指し、ポスターによるポピュレーションアプローチの効果はどの程度あるのか検討することを目的に調査を行った。今後、行動変容ステージを踏まえながら情報量に変化を持たせ、学生が興味を引くポスターを掲示し、繰り返し情報を提供することによって大学における情報へのアクセスの確立を目指したい。(小林知未、金田直子)
11. 地域が主体となる子どもの生活習慣応援事業(子ども食堂)における食事提供と学生ボランティア活動の現状と課題(査読付)	共	2021年1月25日	日本食育学会誌 第15巻第1号	本研究では、「子どもの生活習慣応援事業」における活動の中で可能な子どもに向けた食に関する支援ならびに、持続性のあるボランティア活動としていくために必要な学生支援を検討することとした。学生がボランティア活動を楽しく安心して進めるための支援を行い、継続した活動となる仕組みを構築していく。(金田直子、小林知未、福田ひとみ)
12. 幼児を対象とした望ましい朝食摂取に向けた食育プログラムの実践(査読付)	共	2021年4月25日	日本食育学会誌 第15巻第2号 P95-103	こども園の園児を対象に、望ましい朝食を摂取する園児が増加することを目的し、摂取した朝食の食品群を園児自身に確認させることを意図した朝ごはんシートや食育講話及び保護者へのはたらきかけを意図した食育便り等を取り入れた食育プログラムを実施し、評価した。2今後、園児の望ましい食習慣の形成のために、園児だけでなく、保護者に対しても継続的な教育を実施する必要があると考えられた。(小林知未、森永文也、西尾久子)
13. Nutrition education program changes food intake and baseball	共	2021年6月	Health Education Journal v80 n4 p387-400	高校男子野球選手の食に対する考え方、態度、行動の変化を促進するために、便利な、魅力的な、規範的な(CAN)フレームワークを使用した食育プログラムの効果を検討することを目的とした。CAN栄養教育プログラムは、モチベーションを高め、男性の思春期の選手の間で食事行動の変化を促進する上で効果的である可能性があることが

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
performance in high-school students(査読付)				示唆された。今後、動機付けプロセスを検討し、バランスのとれた食事に寄与する要因を検討する必要があると考えられた。(Yukiko Ueda, Mayuri Sawamoto, Tomomi Kobayashi, Chiho Myojin, Chikae Sakamoto, Naomi Hayami, Hitoshi Watanabe, Nobuko Hongu)
14. 管理栄養士・栄養士を目指す学生の主体的な地域ボランティア活動に向けた支援法の構築とその評価	共	2022年1月31日	帝塚山学院大学研究紀要 2号 P119-129	管理栄養士・栄養士を目指す学生の主体的な地域ボランティア活動に向けた支援法を構築し、その評価を行うことを目的とした。ボランティア活動を行うにあたり、リーダー学生を中心とするピア・エデュケーションの仕組みや相談環境等を整備したところ、ボランティア参加前後で活動負担感が有意に低下した。(金田直子、小林知未、福田ひとみ)
15. 高齢者における緊急事態宣言期間中の生活習慣状況、主観的健康感、心理状況等の関連性に関する検討(査読付)	共	2022年6月15日	日本家政学会誌 第73巻 第6号 P29-37	高齢者を対象として①COVID-19による緊急事態宣言期間中(2020年4月7日～5月21日)における生活習慣状況、主観的健康感、心理状況、食品摂取行動の現状を把握すること、②緊急事態宣言期間中の主観的健康感とその他の因子との関連性について検討することを目的とした。緊急事態宣言期間中における高齢者の生活を調査し、把握できたことより、今後の健康づくりへの支援に繋げていきたい。(小林知未、金田直子)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 食教育推進を目的とした児童の食生活評価		2006年10月26日	第53回日本栄養改善学会学術総会	小学生の食生活の実態把握と評価を行うために、奈良県N小学校の児童へ簡易型自記式食事歴法質問票を実施した。食事の食べるはやさど体型には有意な関連が見られ、食事をはやく食べる児童において、肥満児の割合が高かった。(小林知未、伊達ちぐさ、塚本幾代、上田由喜子、佐々木敏)
2. IT活用による食事調査法の開発に関する予備的検討		2006年12月6日	第5回日本栄養改善学会近畿支部大会	新しい食事調査法として、デジタルカメラとデジタル秤を用いた方法を開発し、食事調査の実施可能性を検討した。料理の重量が分かるため、料理1品に対し、食前に斜め45度から撮影し、食後の食器の撮影する計2回の撮影で良いため、マット法よりも対象者への負担が少ない方法であると考えられた。(田中早苗、小林知未、上地加容子、岡本尚子、福井充、田路千尋、古川曜子、篠原秀子、上田由喜子、伊達ちぐさ)
3. IT活用による食事調査法の開発に関する検討		2007年10月25日	第66回日本公衆衛生学会学術総会	他の食事記録法と比較して、簡便な調査法であるデジタルカメラを用いた2種類(マット法と秤法)の食事調査を、働き盛りの男性を対象に実施した。秤法の方が実行できる者の割合が高かった。また、Webでの写真回収は、対象者のパソコン能力や、パソコン環境が大きく影響した。(小林知未、田中早苗、上地加容子、岡本尚子、福井充、田路千尋、古川曜子、篠原秀子、上田由喜子、伊達ちぐさ)
4. IT活用による若年男性勤務者のための肥満改善プログラムシステムの概略		2007年10月25日	第66回日本公衆衛生学会学術総会	若年男性(20～49歳)のメタボリックシンドローム予防対策として、肥満を改善するための食事・運動介入プログラムを開発することを目的とした。若年男性は働き盛りであり、勤務時間を考慮しなくてはならない。そのため、調査時に時間の制約が少ないWebを活用し、食事と運動の望ましい習慣をつける継続可能な肥満改善プログラムを開発した。(岡本尚子、小林知未、田中早苗、上田由喜子、福井充、伊達ちぐさ)
5. IT活用プログラムによる身体活動の検討		2007年10月25日	第66回日本公衆衛生学会学術総会	若年男性(20～49歳)のメタボリックシンドローム予防対策として、Webを用いた肥満を改善するための食事・運動介入プログラムを開発した。Webを用いて、ほとんどの男性からアンケート結果を回収することができたことから、Webを用いた方法が働き盛りで時間の制約のある若年男性において、実行可能な方法であると考えられた。(上田由喜子、新野弘美、小林知未、田中早苗、岡本尚子、福井充、伊達ちぐさ)
6. 画像による食事記録法の開発とその妥当性		2008年1月25日	第18回日本疫学会学術総会	食事調査を行う際のマット法の妥当性検討を目的とし、15名の対象者にマット法とWDRを実施し、食事写真から管理栄養士8名が食品名とその重量を推定した。マット法は、集団における順位付けには利用できるが、精度にかけることが示唆された。(田中早苗、小林知未、上地加容子、岡本尚子、福井充、田路千尋、古川曜子、篠原秀

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
7. 画像による食事記録法の開発とその妥当性		2008年9月6日	第55回日本栄養改善学会学術総会	子、伊達ちぐさ) マット法と秤法の妥当性検討を行うために、20日分の食事について、WDR、マット法、秤法を同時に実施した。20日分の食事写真から管理栄養士・栄養士10名が独立して、食品名と重量を推定した。マット法より秤法の方がより正確であった。(田中早苗、小林知未、岡本尚子、福井充、田路千尋、上地加容子、篠原秀子、伊達ちぐさ)
8. 料理を質問項目とした小児用食物摂取頻度調査法の開発		2008年9月6日	第55回日本栄養改善学会学術総会	子どもの日常的な食事摂取状況を評価するCFFQを開発するために、幼稚園児・小学生を対象に1日の食事調査を秤法を用いて実施し、質問項目数を75項目とした。小学校の給食摂取状況質問票を加え、CFFQを完成させた。(小林知未、田中早苗、田路千尋、篠原秀子、上村美春、岡本尚子、福井充、伊達ちぐさ)
9. Which is More Effective for Weight Reduction, a dietary Intervention or an Exercise Intervention? : A Randomized Controlled Trial		2008年9月11日	15th International Congress of Diabetics	減量目的による食教育及び運動教育の効果を明らかにするため、奈良県K市及び同県K郡K町の、BMI24以上28kg/m ² 未満の男女住民62名を無作為に4群(食教育と運動教育A、食教育のみB、運動教育のみC、対照D)に分類した。各群における介入期間前後の体重変化は、4群ともに有意に低下した。(Chihiro Toji, Naoko Okamoto, Tomomi Kobayashi, Yoko Furukawa, Sanae Tanaka, Hideko Shinohara, Kayoko Ueji, Mitsuru Fukui, Chigusa Date)
10. 小児用食物摂取頻度調査法の妥当性と再現性の検討		2009年1月24日	第19回日本疫学会学術総会	子どもの日常的な食事摂取状況を評価するために開発したCFFQと成人用に開発されたAFFQを用いて3-11歳の50名の子どもを対象者とし、1ヶ月間隔の2回のCFFQと4回のWDRを実施し、妥当性と再現性を検討した。この年齢の集団においてはAFFQよりもCFFQを適用することが望ましいことが示唆された。(上村美春、小林知未、田路千尋、篠原秀子、福井充、伊達ちぐさ)
11. 成長期のための食事調査法-第1報 成人用食物摂取頻度調査法の適用は可能か?		2009年9月4日	第56回日本栄養改善学会学術総会	子どもの日常的な食事摂取状況を評価するために開発したCFFQと成人用に開発されたAFFQを用いて3-11歳の50名の子どもを対象者とし、1ヶ月間隔の2回のCFFQと4回のWDRを実施し、妥当性と再現性を検討した。この年齢の集団においてはAFFQよりもCFFQを適用することが望ましいことが示唆された。(上村美春、小林知未、今井志乃、北田有紀、田路千尋、篠原秀子、福井充、伊達ちぐさ)
12. 成長期のための食事調査法-第2報 小児用食物摂取頻度調査法の開発と妥当性		2009年9月4日	第56回日本栄養改善学会学術総会	CFFQが子どもの日常的な食事摂取状況を評価するために有用であるか、89名(3-16歳)の子どもを対象者とし、1ヶ月間隔の2回のCFFQと4回のWDRを実施し、妥当性と再現性を検討した。CFFQは園児・小学生群において、日常的な食事摂取状況を評価することが可能な方法であることが分かった。(小林知未、上村美春、今井志乃、北田有紀、田路千尋、篠原秀子、福井充、伊達ちぐさ)
13. 男性勤務者のためのITを活用した減量プログラムの効果：無作為化比較試験		2009年10月22日	第68回日本公衆衛生学会学術総会	働き盛りの男性に、自分の都合に合わせて生活習慣の改善に取り組むことができるWebを活用した1年間の減量プログラムを開発し、無作為化比較試験でその効果を検証した。この減量プログラムは、前期群で有意な減量効果が見られた。(岡本尚子、上田由喜子、小林知未、田路千尋、上村美春、福井充、伊達ちぐさ)
14. 園児・児童の食生活に関連する環境要因について	共	2010年9月5日	第57回日本栄養改善学会学術総会	子どもの食嗜好・生活習慣と母親の意識が、子どもの食事と与える影響について検討した。子どもの栄養素等摂取量は、母親の影響を受けていることから、栄養教育は子ども及び母親にも行う必要があると考えられた。(小林知未、上村美春、今井志乃、古川曜子、岡本尚子、福井充、伊達ちぐさ)
15. バーコードを利用した料理選択方式による栄養診断システムの開発と応用に関する研究	共	2010年10月28日	第69回日本公衆衛生学会学術総会	料理カードとバーコードを用いた食事診断ツール「ピッタシ栄養くん」(以下栄養くん)を開発し、1日分の栄養素摂取量における栄養くんの妥当性を検討した。新しい食事評価方法として、栄養君が有用であることが示唆された。(天野恵、五反田真理、小林知未、加藤亮、内藤義彦)
16. SATシステムによる高齢者を対象とした前日及び習慣的な食事摂取量推定の妥当性	共	2011年9月10日	第58回日本栄養改善学会学術総会	SATシステム(以下、SAT)を用いて高齢者を対象に、前日及び習慣的な食事摂取量推定の妥当性を検討した。高齢者を対象に前日及び習慣的な食事摂取量について、SATを用いて評価することが可能であると考えられた。(小林知未、五反田真理、天野恵、小林千鶴、加藤亮、内藤義彦)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
17. LIFESTYLE FACTORS INFLUENCING THE DIETARY HABITS OF SCHOOL CHILDREN FROM KINDERGARTEN THROUGH JUNIOR HIGH-SCHOOL IN AN URBAN CITY IN JAPAN		2012年9月7日	The 16th International Congress of Dietetics	幼稚園から中学校の子どもの食習慣と生活習慣の現状を知り、食教育プログラムを開発することを目的とした。今後、開発したプログラムを用い、年齢に応じた食教育を行い、評価していきたいと考えている。(Tomomi Kobayashi, Kobayashi Chizuru, Yoshihiko Naito)
18. 新しい食事評価ツールの有用性に関する研究 ～ピタシ栄養君との比較～		2012年10月	第72回日本公衆衛生学会総会(津市)	食事摂取量の把握に役立つ補助教材を使用し、栄養君での栄養素等摂取量の推定精度向上について検討を行った。栄養素等摂取量の相関係数の中央値は0.67であった。(小林知未、小林千鶴、赤利吉弘、内藤義彦)
19. バーコードと料理写真を用いた食事評価指導ツールの開発と妥当性に関する研究		2012年12月2日	第11回日本栄養改善学会近畿支部学術総会	バーコードと料理写真を用いた新しい食事評価ツール「ピタシ栄養君」(以下、栄養君)を用いて、大学生の前日の食事摂取量の推定精度を検討した。大学生で栄養君を用いて前日の食事を良好に再現できると考えられた。今後、対象者が料理をイメージしやすい媒体及び聞き取り調査法を検討していきたいと考える。(小林知未、小林千鶴、内藤義彦)
20. 新しい食事評価指導ツールの妥当性に関する研究 ～食事聞き取り法の検討～		2013年8月	第61回日本栄養改善学会学術総会(横浜市)	新しい食事評価ツールとしてAndroidのタブレット端末を用いた食事評価ツール「栄養君Touch!」(以下、Touch!)を開発した。Touch!を活用することで、食事調査の時間を短縮や負担感を軽減することができる可能性が示唆された。(小林知未、小林千鶴、赤利吉弘、為房恭子、内藤義彦)
21. 高校生における朝食に焦点を当てた食育の推進(第2報) -短期間の食習慣改善指導の効果-		2014年9月	第62回日本栄養改善学会学術総会(福岡市)	公立高校に通う生徒20名を対象に、朝食改善を図ることを目的に食教育を含めた介入を3ヶ月月間実施した。食事で様々な食品を摂取することで、PFC比率の適正化に繋がる可能性が高く、体脂肪率の増加抑制に影響があるのではないかと考えられた。(小林知未、小林千鶴、内藤義彦)
22. ラダリング法を用いた若年女性の食事選択動機に関する研究		2014年11月	第74回日本公衆衛生学会総会(長崎市)	若年女性を対象に食事選択行動とその価値意識との関連を明らかにし、食事を選択する際に影響を及ぼす動機の検討を行い、若年女性の食事選択行動の背景にある価値意識を得ることができた。(小林知未、小林千鶴、湊聡美、内藤義彦)
23. 高校生における朝食に焦点を当てた食育の推進(第3報) -短期間の食習慣改善指導の効果-		2015年9月	第63回日本栄養改善学会学術総会(青森市)	公立高校に通う女子生徒17名を対象に、朝食改善を図ることを目的に食教育を含めた介入を2ヶ月月間実施した。介朝食での野菜摂取の有無が不定愁訴の有無に関連している可能性が示唆された。(小林知未、小林千鶴、内藤義彦)
24. 高齢者における食行動と身体状況との関連について		2016年10月	第76回日本公衆衛生学会総会(鹿児島市)	高齢者の朝食内容や身体状況について把握することを目的とした。朝食の質が体組成と関連していることから、朝食の質について今後指導していく必要があると考えられた。(小林知未、新野弘美、福田ひとみ)
25. 大学生における地域と連携した食育推進に向けた検討		2017年9月	第64回日本栄養改善学会学術総会(新潟市)	大学生における食育推進を目指すために、地域と連携した健康づくりの一環として、大学生に向けた生活習慣病予防教室(以下、予防教室)を試みた。大学生において学年が上がるにつれ食生活の乱れが見られたことから、学生の特性に応じた生活習慣改善対策が必要であることが示唆された。大学生に対する食育は大学のみで実施するのではなく、大学と地域とが連携し、推進していく一案である。(小林知未、金田直子)
26. 大学生における食品購入時の栄養表示の参考度と食習慣・健康行動との関連について		2018年3月	第17回日本栄養改善学会近畿支部学術総会(京都市)	大学生における食品購入時の栄養表示関心度と、食習慣や健康行動との関連について検討した。大学生に対しては、栄養表示の知識や関心を高め、正しい栄養表示の活用方法を提供することで、健康的な食行動を促すことができる可能性があると示唆された。(小林知未、金田直子)
27. 地域における子どもの生活習慣応援事業(子ども食堂)の現状と今後に向けた支援の検討		2018年3月	第17回日本栄養改善学会近畿支部学術総会(京都市)	大阪府S市M校区では、学童期の子どもたちにおける望ましい生活習慣形成に向け、毎月1回、バイキング形式の朝食支援や歯磨き指導、本の読み聞かせを地区組織が主体となり実施しており、本学の希望学生がボランティアとして参加している。食事提供の現状を把握し、今後に向けた支援を検討した。今後、子どもの健やかな成長

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
28. Influence of nutrition education using a poster of nutrition labeling on food selection by Japanese university students		2019年8月6日	The 7th Asian Congress of Nutrition 2019	のための一助となるよう支援を続けていきたい。(金田直子、小林知未、酒巻梨々花、泉川楽生、福田ひとみ) 飲料に着目し、栄養表示に関するポスターを介した栄養教育による食品選択行動への影響について検討した。ポスターを見た者が少なかったことから、より視覚的なポスターにするなどの工夫が必要である。(Naoko Kaneda, Tomomi Kobayashi)
29. The degree of interest of Japanese university students in nutrition labeling		2019年8月6日	The 7th Asian Congress of Nutrition 2019	日本の大学生の栄養表示への関心と、食習慣や健康行動との関連について検討することを目的とした。大学生に対しては、栄養表示への関心を高め、正しい栄養表示の活用方法を提供することで、健康的な商品選択を促すことができる可能性があることが示唆された。(Tomomi Kobayashi, Naoko Kaneda)
30. 園児への「バランスのよい朝食」に焦点を当てた食育介入の有効性に関する検討		2019年9月	第66回日本栄養改善学会学術総会(富山市)	【目的】 こども園に在籍する園児を対象に、「バランスのよい朝食」に焦点を当てた食育介入効果を評価することとした。栄養教育や朝ごはんチェック(朝ごはんシート)を継続的に行うことによって、食知識の習得や朝食習慣の形成につながると考えられ、栄養教育の教材として朝ごはんシートを使用することは有効であると考えられた。(小林知未、西尾久子)
31. 食品広告の現状について		2019年9月	第66回日本栄養改善学会学術総会(富山市)	機能を訴求する食品の広告の実態について調べることが目的とした。ガイドラインに即していない広告もあることから、事業者に対し適切な広告を望むとともに、消費者は、食品の機能性に関する知識をもち、正しく見て判断する力を獲得する必要性が示唆された。(西尾久子、小林知未)(発表者：小林知未)
32. 中学生における野菜に関する意識や知識向上に関する検討		2020年9月(誌面開催)	第67回日本栄養改善学会学術総会(札幌市)	中学生が野菜の知識を得ることで野菜に関する意識や知識が変わるか検討することを目的とした。教育後において、成人における野菜摂取目標量を含めた野菜に関する知識が向上した。(小林知未、西尾久子)
33. 大学生及び高齢者における緊急事態宣言期間中の食生活・心理状況に関する検討		2021年6月12日(誌面開催)	第9回日本食育学会学術大会	COVID-19による緊急事態宣言期間中(以下、期間中)における食生活・心理状況について、高齢者、大学生を対象に検討した。期間中及における食生活・心理状況について①大阪府S市近郊在住の高齢者115名、②食物栄養学科学学生173名を対象にアンケート調査を行った。 期間中と平常時で食品群の摂取頻度が変化している者が見られたことから、期間中に望ましい食生活の提案やストレス軽減方法を発信する必要があると考えられた。(小林知未、北西未奈、副島実祐、金田直子)
34. 中学生の家庭における緊急事態宣言期間中の食生活状況の把握及び食情報提供に関する検討		2021年10月1日(誌面上開催)	第68回日本栄養改善学会学術総会	中学生の家庭におけるCOVID-19緊急事態宣言期間中(以下、宣言期間中)の食生活状況を把握すること及び食育だよりを用いた食情報提供の有用性を検討することを目的とした。今後は生徒に対してもアプローチを行い、更に家庭内での食習慣改善や食に関する意識向上に寄与していきたい。(小林知未、久保佐智美、西尾久子)
35. A Study on the Usefulness of Providing Nutrition Education Materials for Japanese Elementary School Students -Action of Nutrition Education at the Children's Cafeteria and		2022年8月20日	The 8th Asian Congress of Dietetics 2022 (Yokohama, Japan)	小学生向けの栄養教材(ポスター)の有用性と、ポスターにおけるゲーム要素の効果を検討することを本研究の目的とした。食育に関する6枚のポスターを作成し、M小学校の保健室前廊下と、B学区の子ども食堂に掲示した。ポスターは1ヶ月間掲示し、2021年10月末にM小学校の児童61名と教員16名に、食育教材の有用性について自記式アンケートを実施した。ポスターの内容に遊びの要素を取り入れることで、児童の理解度を向上させる可能性が示唆された。(Tomomi Kobayashi, Naoko Kaneda, Hitomi Fukuda)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
Elementary School-				
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 地域高齢者の市販弁当等の購買状況を踏まえた適切な食事の普及啓発のための研究	共	2017年4月～2020年3月31日	厚生労働科学研究費 代表：東京都健康長寿医療センター研究所 本川 佳子	高齢者を対象とした市販弁当等の利用実態や、市販弁当等の利用を考慮した食事パターン、市販弁当等の栄養素等摂取量の実態を把握し、(1)都市部、地方の地域在住高齢者を対象に市販弁当等購入を考慮した食事調査および市販弁当等の食品分析を行い、基礎的データを構築すること、(2)得られた食事パターン別に食事摂取基準と比較して過不足傾向のある栄養素等について検討し、適切な摂取に資する普及啓発用資料の素案を作成することを目的に調査を行った。 (研究分担者)
2. 高校野球選手のパフォーマンスと身体組成、トレーニングおよび栄養教育カリキュラムの研究	共	2019年4月	文部科学省 ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型） (代表：上田由喜子)	高校野球選手を対象に競技特性を考慮したカリキュラム的増量プログラムの介入が、パフォーマンスや身体組成に及ぼす影響を明らかにし、科学的教育プログラム開発に繋げることを目的に実施した。 (共同研究者)
3. 地域における子どもの生活習慣応援事業（こども食堂）での食育支援とその評価に関する研究	単	2020年9月	令和2年度ダイバーシティ推進センター女性研究者賞 ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）	子どもの食堂において、新しい生活様式を取り入れた食環境の整備を行い、感染予防下における食育教材の内容や提示方法を検討した。（研究代表）
4. 児童の食生活改善のための食育支援とその評価に関する検討	単	2021年	地域を対象とした連携推進支援事業	児童が使用可能な食育ノートの開発を行った。また、子ども食堂や小学校で活用可能な食育教材の開発を行い、その評価を行った。 (研究代表)
5. 乳幼児の発育・発達、栄養状態の簡易な評価手法の検討に関する研究	共	2021年4月～	厚生労働科学研究費補助金 疾病・障害対策研究分野 成育疾患克服等次世代育成基盤研究(21DA2001) 代表：国立保健医療科学院 生涯健康研究部 横山 徹爾	乳幼児の栄養状態の簡易な評価手法の開発に携わっている。（研究分担者）
6. 乳幼児の栄養方法等の実態把握等に関する研究	共	2022年4月～	厚生労働行政推進調査事業費（次世代育成基盤研究事業（健やか次世代育成総合研究事業））（22DA2001） 代表：国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所	乳幼児の栄養方法等の実態把握等の研究に携わっている。（研究協力者）
7. 高校生アスリート用携帯端末栄養評価ツールを用いた食事介入の有用性に関する研究	単	2022年4月～	瀧本 秀美 科学研究費助成事業 2022年度 基盤研究(C) 課題番号：22K12305(研究代	高校生アスリート用の携帯端末栄養評価ツールの開発、および、食事介入の効果を評価する。（研究代表者）

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
-------------	---------	-----------	-------------------	----

6. 研究費の取得状況

る研究			表)	
-----	--	--	----	--

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2022年6月28日～2023年3月31日	日本健康教育学会 日本家政学会 日本食育学会 日本公衆衛生学会 日本栄養改善学会 健康的で持続可能な食環境戦略イニシアチブに設置予定の運営委員会及び行動目標推進部会委員(厚生労働省)